

とかす力（八木重吉の詩を愛好する会会報）

事務局（連絡先）〒277-0014 千葉県柏市東 3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会

*****天利武人（教会牧師）電話 04-7164-9159

（会報編集、ホームページの連絡先）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継

***** Eメール kmat27aiko@gmail.com 携帯電話 09061674553

☆ 第 12 号

☆2016年(平成28年)

9月26日 発行

★今年の茶の花忌の案内

ご無沙汰しています。2016年の茶の花忌が近づいてきました。ここ数年は当主の八木藤雄さんに代わり、長女の佐藤ひろ子さんが茶の花忌を主催していますが、いつも準備は大変と聞いています。今年は、昨年から予告されていましたが、町田市民文学館が八木重吉展を開催します。（資料を同封しました）10月22日から12月25日まで予定されており、茶の花忌の26日も開かれています。そこで今年の茶の花忌は、墓前礼拝は例年通り催されますが、その後の生家の庭での行事は割愛して、八木重吉展見学に合流するそうです。文学館の手配で25人乗れるマイクロバスが生家まで迎えに来てくれます。ただし当日墓前礼拝に集まる人が多いと不足するかもしれませんが、乗り合いバスを利用して相原駅まで行き、電車で町田まで行っても1時間ぐらいで行けます。生家の負担を考えると、講演や歌唱等の行事は、墓前礼拝と分離して、愛好者たちで企画していくことが今後の方針として考えられ始めています。そのはじめとして、今年は市民文学館が八木重吉展に招待してくれます。生家でそのまま記念館見学をしてゆっくり過ごしたい人は、そのまま自由に見学はできるとのことです。

★昨年の報告

1) 茶の花忌

2015年の茶の花忌は、秋空の好天の下で始まりました。小林茂牧師による墓前礼拝での感話は、赤ん坊があんあん泣く姿を、「神様を呼んでいる」と表現した重吉の詩がテーマでした。十字架の詩を前にして、「アバ父よ」と呼びかけ「御心のままに」と委ね祈ったキリストのごとく、重吉は、あんあん泣く赤ん坊の姿を、神に信頼を寄せる姿として見ている、と語ってくださいました。

生家の庭に移動して、地元の杉浦さんによる司会で催しは続きました。まず八木藤雄さんが出られない状況の中で、代わりに茶の花忌を主催している長女の佐藤ひろ子さんを助けている、加藤正彦氏の世話人代表挨拶では、加藤さんが「詩以上の詩」と題した加藤武雄（正彦氏の叔父にあたる）の文章を読み上げました。それは登美子夫人が、重吉の詩を保存して世に出るようにしてくれたことを評価する記事でした。

続いて詩人で、朗読もされる八木幹夫氏が「八木重吉の詩は何故人の心を」という演題で話をされました。八木氏は相模原市の生まれで、八木姓をもつ著名な詩人。ただし八木重吉の家との関係はないとのこと。橋本の八木洋服店を営んでいた叔父さんから、重吉の詩を紹介されて好きになったようです。重吉の詩は平明で、飾り気がない。4、5年で集中的に書かれた重吉の詩には津久井県の風土が染みついている、親の反対を買った恋愛をしたために故郷を喪失したが、ふるさとへの思いが詩の言葉に現れて来ると言われました。また〈果物さえも殺さずに生きたい〉と願う重吉の純粹さに共感しており、さらに好きな詩の1つとして八木氏は〈わたしのまちがいだった／わたしの まちがいだった／ こうして 草にすわれば それがわかる〉を引用して語られた。

次に、相模原市の城山で〈地域の歴史こぼれ話を語る会〉で活躍されてきた田中次雄氏が、「八木重吉の詩碑を訪ねて」という演題で、話をしてくださいました。田中氏は、生まれ育ちは兵庫県西宮（詩碑「幼い日」がある）で、重吉への愛着を持って詩碑を巡られたとのこと。重吉に関して出版された本を、時系列に並べてみた配布資料が、かなりの枚数になったことから、重吉の詩が愛され続けていることを示し、重吉の詩を切り絵や絵に表現する愛好者たちと、「祈りの道」というタイトルの本などを書くような、伝道活動のヒントにする愛好者たちがいると分類されました。また詩碑を訪ねての行程では、愛知県の西尾に行って調べた時のことを語り、仏教者でもある坂村真民さんが重吉に触発されて詩人になったことを話してくださいました。

次に柏30年記念の事を話してほしいということで、私（小林）も、東葛飾高校の事、詩碑「原っぱ」の事、そして御影の地に愛好グループが無いのが残念であるが、柏と茅ヶ崎にはあることを告げ、10周年行事を行ったばかりの茅ヶ崎の様子については、出席されていた川井盛次さんに語ってもらいました。

最後、恒例の奈良操さんが重吉詩を数曲歌って下さり、茶の花忌は終わりました。



墓前礼拝



加藤正彦氏



八木幹夫氏



田中次雄氏

2) 茅ヶ崎の詩碑「蟲」10周年記念会

2015年10月4日、茅ヶ崎図書館で重吉の詩碑「蟲」の10周年を祝う行事が開かれました。「茅ヶ崎八木重吉の会」の会長川井盛次さんと会のメンバーの主催で、茅ヶ崎市長も臨席する中で、100名近くの方々が参加して開かれました。久しぶりに昔からの重吉愛好者である小川宣二さんの顔も見ることが出来ました。

会のメンバーの一人である亀井さんの司会で始まった行事は、まず川井さんの挨拶があり、10年前の詩碑建立の時に発行された記念誌『花と咲く』のタイトルに言及し、いろいろな意味にとれる言葉で、読者それぞれの解釈でいいと言われました。また10年前13名で「八木重吉の会」を結成してから今までに、すでに3名の方がなくなっていると報告されました。

茅ヶ崎ゆかりの文人が多い事も有り、市が文化発展に力を入れていることを示すかのように、服部市長も参加されて挨拶されました。私（小林）も柏の事、茅ヶ崎の詩碑を待ち焦がれていた10年前の思い等を語らさせていただきました。続いて会のメンバーによる重吉詩の朗読があり、メイン行事の講演に入りました。

講演の第1は、川井氏の「八木重吉の詩魂」であり、4つの言葉（息、光、空、水）をテーマとして取り上げ、その言葉に込められた重吉の思いを分析されました。つづいて栗林さとしさんにより、バックミュージックを背景に、情緒豊かな本格的な重吉詩の朗読が続き、さらに混声合唱団「カヤ」による「蟲」の合唱が続きました。

そしてメイン講師荻部幹央氏による第2の講演「八木重吉におけるこころとかなしみについて」では、深い分析に基づいた話が展開されました。肺結核で29歳の若さで亡くなり、友人も少ない孤独人という知識から、重吉の「かなしみ」という言葉を否定的な感傷イメージだけでとらえやすいが、重吉が「かなしみ」を愛するほどまでに多用した心の奥底には何があったのか、このような愛好者達の疑問に答えるがごとく、荻部氏は、多様な文献を研究され分析した成果を示され、柳田邦男氏が表現した「悲しみの復権」の必要性に言及されました。「悲しみ」の感情をしっかりと受け止める心の大切さが、明日を生きるエネルギー源にならなくてはいけないのではないかと。それを暗示するような重吉の「かなしみ」の詩だからこそ、単なる感傷を越えた、読者の共感を呼ぶ詩になっているのではないか、荻部氏の講演は、重吉愛好者にとって、気になりながらそれが何なのかわからなかった「かなしみ」の秘密の1つの結論を示して下さったような気がしました。



八木重吉の会と川井盛次氏



茅ヶ崎の参加者たち



荻部幹央氏

3) 柏の詩碑「原っぱ」30周年記念会

2015年は、詩碑「原っぱ」ができて30周年の年でした。1985（昭和60）年2月に愛好会が結成され、すぐ

に詩碑建立委員会も立ち上げ、その年の10月26日に完成、11月4日に詩碑の除幕式を行ってから30年が過ぎました。2015年の茶の花忌が終わって間もない10月31日、ホザナ幼稚園を借りての30周年行事が開催されました。柏市の愛好者で柏市の文化に興味を持っている梶川氏と茨城の愛好家で重吉の基督教信仰の研究家である藤山修氏に講演をしてもらい、その後九州から来られた金野実加枝氏による詩の独唱と語りが続きました。

当日はまず建立30周年をふり返って、事務局の天利武人牧師が、建立当時のいろいろな思い出を語りました。次に元柏市役所勤務で文芸サークルOBの梶川泉一郎氏が「八木重吉が生活した柏の自然」という題で話して下さいました。重吉が詩にうたった日常の風景や様子は、当時の柏の自然の姿を良くとらえて表現し、ふるさとの自然を愛した重吉は、万葉のふるさとの一角にある柏の自然も愛しました。江戸時代、小金牧の中にあった柏は、遠く筑波や富士山も望める、だだっぴろい原っぱの自然でもあり、梶川氏は、原っぱの自然が残っていた時代の柏を思い出させてくれる重吉の詩に共感して愛好し続けているとのことでした。

メイン講師は、茨城基督教大学講師、茨城の重吉愛好者、そして数年前まで開催されていたシンポジウムを推進して下さっていた藤山修氏による「八木重吉の詩作と信仰」でした。まず、まど・みちお氏の詩作が童謡と詩に類型化でき、後者は、「内面に密着し、個別化、意識化を促し、知的な高度化をとげ、普遍性を求め、詩人の世界観の表現となる」ものであり、重吉の信仰の詩は、まさにこれに当たると言われました。藤山氏は、重吉が詩作しながらキリストとの一体を目指してゆく時、キリストに全くは従えない自分を責め、詩を作る事さえ、自己正当化の浅ましい姿ではないかと断罪する一方、詩を書くことは生きている証し、書かざるを得ないという、信仰と詩作の葛藤に置かれている姿を、多くの詩を引用して示しながら、死の直前には、ますますキリストに近づき、重吉が信仰の到達すべき極点に達したと語って下さいました。

講演の後は、重吉詩の独唱が続きました。やはり熱心な愛好者である金野実加枝氏による詩の独唱と語りです。ピアノ伴奏は井上ナオミ氏が引き受けて下さいました。語りが伴う事で、いっそう情緒豊かな雰囲気が増幅されての独唱に聴衆は心地よく聴き入りました。



参加者たち



梶川泉一郎氏



藤山修氏



金野実加枝氏

4) 東葛飾高校創立90周年記念行事

2015年10月10日(土)に、柏の東葛飾高校90周年の記念事業として、東葛飾高校の定時制食堂の場所で、朗読劇「いっぽんのみちを」が、〈れいたく朗読劇グループ R〉によって発表されました。高校(旧制中学)の創立が大正13年で、新築校舎が現在の地に完成して入った14年に、八木重吉が赴任して来て、8月に処女詩集『秋の瞳』が発行されています。ですから東葛飾高校の歴史の初めを飾った詩人ですから、90周年を祝う企画に採用されたようです。主催した90周年記念事業実行委員会の母体である同窓会が会合に使っている、高校内にある研修施設は「秋瞳館」と呼ばれていますが、『秋の瞳』にちなんでいることは明らかです。昭和60年に建立された詩碑「原っぱ」も道路側に面して造られているので、多くの人々の目に入るようになってきました。



東葛飾高校内にある詩碑「原っぱ」



朗読劇の様子

人間が犯している間違い

草にすわり、何がわかったというのかー。

結核のために 29 歳で早世した詩人・八木重吉の詩「草にすわる」の最後の 1 行。全体でもわずか 3 行の詩には、読む者の心を捉えて離さぬ切実さがある。

わたしのまちが이었다

わたしの まちが이었다

こうして 草にすわれば それがわかる



重吉入院当時の面影を残す南湖院「第一病舎」

「まちがい」が何であるのかは書かれない。しかし読めば、己と重ねずにはいられなくなるのは、過ちを犯さぬ人などいないからだろう。直木賞作家の白石一文さん（57）もそうだった。デビューの数年後、40 歳をいくつか越えた頃に誰かのエッセーで知り、当時勤めていた文芸春秋の資料室で詩集を探した。「自分も人生を間違えた、と確信していましたから」

訳あって妻子を置いて家を出ていた。心のバランスを崩し、会社では一線の部署から外れていた。「パニック障害だったんです。心臓が急にドキドキし、このまま死ぬのではないかと、いつもおびえていた。」

病は徐々に快方に向かったが、小説を書く自信が戻らない。そんな時に手探りで執筆したのは、どこか自分にも似た、生きる気力を失った男の再生の物語。彼の好きな詩として重吉の作品を引用し、草に座るシーンに意味を持たせた。小説のタイトルも「草にすわる」。「この詩があったから書けたんだと思う」

キリスト教徒だった重吉の詩は内省的だ。人間の原罪にまで思いを馳せていたからに違いなく、死がより近くにあった時代だったことも影響したはずだ。「草にすわる」を書いたのは結核発病前の、兵庫県で教鞭を執っていた 20 代半ばのことだが、その前にも肺炎で死線をさまよっていた。2 人の子も相次いで結核で死ぬ。それが重吉の死後だったことが、せめてもの救いだろうか。

1926 年 5 月、結核を発症した重吉は、「東洋一のサナトリウム」とも呼ばれた神奈川・茅ヶ崎の「南湖院」に入り、7 月には家族と暮らすため、近くの貸別荘に移る。28 歳。残された時間は、1 年余だった。

★あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

皆さんの、愛する重吉に対する思いを原稿にしてください。ファンの思いを後世に残すという目標で企画しています。昨年 6 人書いてくださいましたが、今年も続けて募集します

（募集） 題：「八木重吉との出会いとその詩の魅力」

字数：2000 字程度（原稿用紙 5 枚程度、パソコンのワード歓迎）

締切：なし（随時お送りください）

送り先：メール（ kmat27aiko@gmail.com ）か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中 205 小林正継 へ

★ホームページ案内

一昨年から「八木重吉の詩を愛好する会」のホームページを開設して情報提供しています。また連絡欄を通して全国の愛好者と情報を共有していきたいと思っています。ぜひご利用ください。

ホームページのアドレスと、管理者への問い合わせや情報提供のための E メールアドレスは以下です。

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> （作成途中の部分があることをご了解下さい）

E メールアドレス kmat27aiko@gmail.com （管理者小林正継）